

学生相談室からのおしゃべりタイム

「ルーツ」が輝く世界のウチナンチュ大会

第8号

沖縄キリスト教学院大学・沖縄キリスト教短期大学

2016年11月

「世界のウチナンチュ大会」は終わった。大会に少し参加し、ニュースなどを見聞きしながら思ったことは、自分の「ルーツ」を持っていることの大切さである。人は一人で育つのではなく、土地と精神文化と人間関係の中で、自分の根を育てていく。人も木と同様に根（人間関係のつながり）がしっかりしているとどんどん育つことができる。人はパンのみでは生きられない。人が生きるには、愛と絆と人間信頼が必要だ。

裏面に「世界のウチナンチュの日」宣言文を紹介したが、ここにルーツ（先祖とのつながりや精神文化）の持つ力が存分に発揮されている。人生は、ウチナンチュとしての誇りがあるのとないのとは大きく違う。ウチナンチュに限らないが、自分のルーツを自覚することで、ゆるぎない自己の中心を持ち、自分のいる場所で輝く幸せ者となるのだ。

38年前、私は当時流行っていたアレクサンダー・ヘイリーの「ルーツ」という長い小説に夢中になっていた。それは、奴隷にされた黒人一族の歴史を調べ、小説にした物語であった。奴隷狩りにあった物語の主人公は、作者ヘイリーの曾曾曾曾祖父であり、西アフリカのガンビアで暮らしていたクンタ・キンテである。クンタ・キンテは1767年に奴隷狩りでアメリカにつれてこられ、奴隷にされているが、彼は自分の物語を子どもたちに伝え、その子孫たちもキンテの物語を語り継ぎ、さらに自分たちの物語をも数代にわたって語り継いだ。これらを12年もかけて調べ、小説にすることで、ヘイリーは自分のルーツに誇りをもち、多くの黒人たちの誇りを回復させ、周りの偏見を返上したのである。「ルーツ」は全米ベストセラーとなり、テレビドラマにもなった。

私は学生時代、東京で沖縄への偏見に圧倒されていた一人である。沖縄を馬鹿にする奴は許さないという気持ちから、あえて、沖縄出身であることを強調し、自分は日本人だろうかと考えたりもした。周りが冷たかった訳ではない。むしろ親切であった。心が弱くて自分自身の中にある沖縄への偏見から自由になっていなかったのだ。

今、沖縄は偏見を返上し、沖縄になった。学生の皆さんに、宣言文に書かれた沖縄人の誇りを覚えていて欲しいと思う。どんなに苦しい境遇にいても、物語は、そこからしか始まらない。見つめ合い、支え合う人間関係の絆があってこそ人生の物語は進んでいく。あなたは、素晴らしいたくさんのおじいさんやおばあさんの子孫である。あなたは、先祖の見えない歴史を引き受けて、進化の最前線にいる重要な存在である。あなたには、無限ともいえる可能性があるのだ。

相談室に遊びに来てください。あなたの物語を聞かせて下さい。

(カウンセラー・浅野恵美子)

「世界のウチナーンチュの日」宣言

我々は今日、世界のウチナーンチュのみなさんに伝えたい。
我々ウチナーンチュは持っている。
我々ウチナーンチュは未来を創造する力を持っている。
我々ウチナーンチュは未来への希望を持っている。
我々ウチナーンチュは世界へ飛び立つ勇氣を持っている。
我々ウチナーンチュは互いを許し合う寛容の心を持っている。
我々ウチナーンチュは互いを助け合う相互扶助の心を持っている。
我々ウチナーンチュは豊かな伝統文化を持っている。
我々ウチナーンチュは困難に打ち勝つ不屈な心を持っている。
我々ウチナーンチュは先祖への感謝の心を持っている。
我々ウチナーンチュは家族を愛する心を持っている。
我々ウチナーンチュは出会った人を愛する心を持っている。
我々ウチナーンチュは郷土を愛する心を持っている。
我々ウチナーンチュは平和を愛する心を持っている。
我々ウチナーンチュはウチナーンチュであることに誇りをもっている。

我々ウチナーンチュは一つになる。
ウチナーンチュがウチナーンチュであることを祝おうではないか。
ふたたび世界中からウチナーンチュが集まった今日10月30日を祝い、
「世界のウチナーンチュの日」としようではないか。
今日10月30日を、「世界のウチナーンチュの日」とし、
この誇りを我々ウチナーンチュの魂に刻み込もうではないか。
ここに誇りを持って宣言します。今日は、「世界のウチナーンチュの日」です。
今日は、めでたい「世界のウチナーンチュの日」です。

おめでとう、世界のウチナーンチュ。
いっぺーにふえーでびる。

(太線筆者 2016年10月31日 沖縄タイムス掲載)